

富谷市明石地区の高橋敏雄さんは平成4年からブルーベリーの栽培を始め、平成15年から摘み取り園を営んでいる。7月からの開園に向けて準備に余念がない。

高橋さんは工務店を営む兼業農家で、栽培のきっかけは老後でも栽培できる作物を探したところ、果実が軽く、市で栽培が盛んなブルーベリーを選んだ。「過湿に弱いことを失念し、減反ほ場に定植してしまった。高畝や明渠で徐々に改善していった」と当時を振り返る。現在は60aに1500本を定植。寒冷地に適したノーザンハイブッシュ系統を主にし、果実が500円硬貨ほどになるチャンドラーを目玉に約20品種を栽培している。「収穫時期のほか、摘み取り園用と出荷向きの品種を万遍なく選ぶのが大事」と話す。

栽培方法は日当たりが良く、収穫が容易な開心自然形と呼ばれる樹形に仕上げている。「栽培当初に比べて収穫期が高温になった。効率よく収穫しないと過熟果でロスが増えるため、剪定から収穫が始まっていると言える」とコツを語る。

高橋さんは後継者がいない。「体が続く限り栽培は続けていきたい。今年も来園する人々の笑顔を心待ちにしている」と話す。

【記事執筆】 宮城県農業会議

生育状況を確認する高橋さん



捕植用苗木は常に育成している



ほ場の様子

